

映画の紹介

チベット問題が知れ渡った、今だからこそ見たい映画

『セブンイヤーズ・イン・チベット』

1997年制作 アメリカ映画

ブラッドピット主演。

実在したオーストリアの世界的登山家ハインリヒ・ハラーの、実体験に基づく原作を映画化した一大叙事詩。神秘的な禁断の地・チベットを舞台に、ひとりの登山家がたどる魂の遍歴を描く。ジャン・ジャック・アノー監督作。

- 1939年、世界最高峰の制覇を目指し、ヒマラヤ山脈へと向かった登山家ハラー。

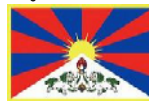
だが彼は第二次世界大戦の勃発により、イギリス軍の捕虜となってしまふ。

登山仲間と共に、ヒマラヤ山脈を越える決死の脱出を図るハラーたち。そして逃亡の果て、彼らはチベットの聖地へとたどり着く -



チベットは、かつては日本の友邦国でした。そもそもチベットは立派な独立国なんですよ。1951年に清との戦争に勝利したダライ・ラマ十三世は、チベットの独立宣言を發布しました。同じ時期に日本から派遣されていた、青木文教は、ダライ・ラマ十三世とも親しく独立時に作られたチベット国旗「雪山獅子」の作成にも関与しています。チベット国旗に「旭日」が描かれているのは、そうした日本との深い絆があったからなんです。チベットは、第二次大戦当時、日本の敵国だったアメリカの武器運搬ルートを提供することを断ったり、経済封鎖されて苦しい状態に置かれている日本に支援物資を送ったりと、日本との同盟に殉じてくれたんです。同じ仏教国が苦しい思いをしているから...と。

この仏教の真理が国際政治の現実の中で悲劇をもたらしました。昭和20年8月15日、日本敗戦同盟国だった国々が日本に宣戦布告する中で、チベットは外交を継続していたため戦勝国によって「敗戦国扱い」されたことになったのです。それは、チベットが、まさに仏教の理想そのままの国家だったからにほかなりません。日本にはチベットの人権問題を救済する愚義があるんです。



読んで欲しい本

『中国はいかにチベットを侵略したか』

無抵抗で侵略を受け入れると、

その民族がどうなるのか・・・

「無抵抗平和都市宣言！」などと言った運動をしている人達は、チベットの惨状を目に焼き付けるべきだと思う。そもそも、そんな怪しげなことを宣伝している人たちは中国の回し者なんだと、確信してきた今日この頃...

